土の絵

土の絵

井上　靖

集英社

土の絵

昭和四十七年十一月二十日　初版印刷
昭和四十七年十一月二十五日　初版発行

定価　八八〇円

著者　井上靖
発行者　陶山巌
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ッ橋二の五の十
郵便番号　一〇一
電話　東京（二六五）六一一一
振替　東京　一五六五三
印刷所　大文堂印刷株式会社
製本所　有限会社石橋製本工場

著者との了解により検印を廃止します
乱丁・落丁本はお取替えいたします

© 1972 Y. Inoue

0093—771006—3041

目

次

海の欠片　七
ある交友　二九
胡姫　五七
土の絵　七三
春の入江　八九
別れの旅　一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

城あと　一六一
青葉の旅　一九五
冬の月　二三一
海　二五三
トランプ占い　二六七

装丁　横山　操

土の絵

海の欠片（かけら）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

田島は半島の突端部にあるホテルへ着いた翌日、朝食後にホテルの周辺を散歩した。どこも足場の悪い坂道になっていて、ひどく歩きにくかった。大体ホテルというのが半島の突端部の丘陵地帯にできていて、辛うじてホテルの敷地何千坪かがやや平坦になっているだけで、あとは岩石が露出した荒い地盤がところどころに丈の低い赤松の林を載せて、勝手気儘な高低を見せ、半ば断崖を形成して海へ落ち込んでいる。従って道はやたらに上ったり下ったりして、岩石の上や赤松の林の中を這っていた。

その替り風景は素晴らしかった。どこを歩いていても、眼を上げると海の一部が見えた。海の一部と言うのは、半島を取り巻く海そのものが大きな入江をなしていて、そこに無数と言っていいくらいの島嶼(とうしょ)が散らばっているので、いつ眼を遣っても、眼にはいって来るのは幾つかの島々に挾まれた海の一部であった。海の欠片(かけら)であった。島は申し合せたようにひと握りほどの小さい島で、いずれもホテルのある半島と同じように、丈低い赤松を載せている。

田島はかねがねこの半島の風光の美しさを耳にしており、いつか一度訪れてみたいと思っていたが、たまたま半島の基部にある古い町に、田島が経営している会社の代理店のようなものが設けられることになり、そんなことでその町にやって来、その序でに自動車で二時間足らずの半島のホテルへと足をのばしたのである。ホテルは外人目当ての夏場向きのものであった。一年中開いてはい

るが、冬季は風が強く、そのために、当然避寒客で賑っていい筈なのに十月頃から翌年三月頃までは閑散としているということだった。

「夏場だけですよ。景色がいいだけではお客さまは来ません。近くゴルフ場ができますが、そしたら少しは増しになるかも知れません」

フロントの事務員は言ったが、夏が過ぎた許りという十月の初めの今も、部屋の半数以上は空いている模様だった。

併し、田島は平生忙しく過していたので、ここのホテルも、ホテルを取り巻く風光も気にいっていた。田島は薄い毛糸のスエターを纏った姿で荒磯の方へ降りて行ったり、また崖っぷちの道を上ったりした。

そうしているうちに、田島はデントンと片仮名で書かれた外人名前の立札を路傍に見付けた。なるほど立札の立っているところから、幾らか人工的に丸太を使って足場を踏み固めた道が磯の方へ降りている。人家は見えないが別荘でもある感じである。

田島はこうしたところに家があろうとは思っていなかったので、意外にも思ったし、多少の好奇心も手伝って、その道を降って行ってみた。道は途中から傾斜の烈しい坂道になって、断崖の斜面に沿って曲っていたが、その曲りを過ぎると、急に視界が開けた。田島が思わず足を停めた程、眼下のすぐ近いところに青い海面が置かれてあり、赤い屋根の洋館の家が見降ろせた。

そこには小さい入江があった。土地の人以外誰もこんなところにこんな入江が匿されているとは思わないだろう。田島にはいま見降ろしている入江だけが特別に青く見えた。その入江は細くはい

り込んでいて、そのはいり込んだ一番奥にほんの僅かな猫の額ほどの砂浜を持ち、砂浜から一段高くなった岩の台地の上に、屋根の赤い家が建てられてある。

田島はいま自分の立っている道がその家の専用の道であり、そこを降りて行けば否応なしにその家の玄関口へ出ることは判っていたが、どうせ半分以上降りかけてしまったことでもあり、そのまま構わず降りて行ってみる気になった。

降りきったところにもう一つデントンと書いたしゃれた表札があった。門はなかったが、そこがその家の敷地であることは誰も認めないわけには行かない。家と家の庭以外、そこには全く余地というものはなかった。片方は海で、片方は崖が迫っている。それでも芝生の庭は百坪ぐらいはあるだろう。家の窓がどこも開いていないところを見ると、人は住んでいないに違いなかった。田島は芝生の庭に足を踏み入れた。上から見降ろした時思ったより家はずっと大きかった。応接室らしい角部屋の前を廻って海に面した庭に出てみた。小さい海が、この家の持物のようにひそやかに置かれてある。波はなく、砂浜も掃き清めたように綺麗だった。

田島はどうせ見せて貰うなら全部見せて貰おうと思った。前庭を突切って横手に廻って行った時、田島は前方の温室らしい硝子張りの建物の中から、ふいに一人の仕事着の老人が出て来るのを見た。田島ははっとして、咄嗟に、

「失礼しています」

そんな言葉を、まだかなりの距離のある相手にぶつけた。老人は腰を伸ばすようにして、ゆっくりと田島の方を見た。外人ではなく日本人で、留守番か何かの老人といった風貌であり、服装であ

った。
「なんの」
　相手は言った。
「無断でお庭にはいり込んでしまいまして」
「なんの」
　相手は少しも咎めている顔ではなかった。
「最近は見えませんが、夏場は時々いろんな人が降りて来ます。あんたさんもホテルのお客さんかね」
　そう老人は訊いた。
「そうです」
　田島は気持が静まると、
「いいお住居ですね」
　と、改めて四辺を見廻すようにした。すると老人は、
「わたしはこの家の留守番ですが、さあ、いいと言うんですかな。住んでる分には静かですが」
「ここにずっとお一人でお住まいですか」
「家内と二人です。もう八年程になります」
　それから老人は、
「外国人というのは酔狂なものですね。撰りにも撰って、こんなところへ別荘を作りまして、それ

も、あんた、一年のうち一週間しか来ませんが」
と言った。
「アメリカの人ですか」
「アメリカ人です。国籍はアメリカですが、スエーデンかどこかの人だということを聞いたこともあります。が、まあアメリカ人と言っていいでしょう。ニューヨークに住んでいるんですから」
「日本に居るんじゃないんですか」
驚いて田島は訊いた。
「なんの、あんた、いつもニューヨークに住んで居て、毎年七月の初めに一週間だけをここで過しに来ますんじゃ。高い金使って、なんのために、わざわざこんなところに来るか気が知れませんが、外国の金持というものは、わたしらの理解の外のことをするもんです」
「ほかにも別荘があるんですか」
「ほかって、日本にですか」
「そう」
「日本ではここだけです。ニューヨークから来て東京で一泊し、すぐここにやって来て、一週間過し、その間に商売の客を招んで一晩パーティを開きます。それからまた東京へ行って、すぐ飛行機でニューヨークへ帰る」
「ここがそんなに気にいってるんですか」
「そうらしいですね。初めヨット・ハーバーにいいと言って、ここに家を造る気になったらしいん

ですが、いまだにヨットは持って来ません。よほど手広く貿易の仕事をやっているらしく、何といっても忙しいですわ。ヨットどころじゃない」

そう言って、ちょっと老人は笑った。ヨット・ハーバーにいいと言えば、なるほどこの細長い入江はそうしたものには適しているのかも知れないと田島は思った。

「まあ、お茶でも飲みませんか」

老人は言った。老人は話相手に飢えてでもいる風で、

「折角、ここまで降りて来なさったんじゃ。まあ、お茶でも飲んでゆっくりなされ」

そう言って、建物の方へ向って歩き出した。そして歩きながら、ここは地下室で洋酒を入れておくところだとか、ここが一年に一週間だけ使う調理室の入口だとか、調理室の引出しの中には何十人分かのナイフとホークのセットが仕舞ってあるとか、そんなことを多少自慢げに説明した。

「幾つぐらいの人ですか」

田島は訊いた。

「六十ぐらいでしょう。奥さんは若いです。若いと言っても四十は少し過ぎていると思いますが」

「子供さんは?」

「それがあると言っていいか、ないと言っていいか」

老人はそんな風に言ってから、自分たちの部屋であるらしい台所の横の戸口を開けた。田島は内部へ招じ入れられるのかと思っていると、老人は自分だけ内部へはいって行って椅子と小さい卓を運び出して来た。そして田島を芝生の上に置いた椅子に坐らせ、自分も対かい合って坐を占めてか

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com